連載・青少年健全育成シリーズ　第295回

「子どもを大人にする『仕組み』」

昔の、といっても一九六〇年代頃まで残っていた農山村の生活は、子どもの成長・発達にとってどのような意義を持っていたのでしょうか。今回は、子どもの「仕事」という点から少し考えてみたいと思います。

昔の農山村の生活では、子どもにも相応の仕事が割り当てられていました。たとえば、水汲みや風呂焚き、子守り、薪割り、農産物出荷用の箱づくり、麦踏み、牛の餌やり、堆肥の切り返し等々。これらの雑多な仕事の大事なポイントの一つは、たんなる「お手伝い」ではなく、農山村での生活と農林業を中心とした生業にとって不可欠の「仕事」の一部であったという点です。そして、こうした仕事がなければ生活や生業が成り立たないことが、子ども自身にもよく見えていました。子どもは立派な、そして期待される働き手の一員だったのです。

もう一つの大事なポイントは、こうした仕事が子どもの年齢や経験に沿って、簡単なものから難しいものへ、小さな力ですむものから大きな力が必要なものへ、家内的な仕事から社会的な仕事へと、段階的に割り当てられていたという点です。この段階の変わり目ごとに、子どもには二つの感覚がもたらされました。一つは、「この仕事はできるようになった」という「自信」と「有用感」の感覚、もう一つは、「これで一つ大人に近付いた」という感覚です。

子どもは、「うまくできるようになった」「お前のおかげで出荷できる」といった大人たちの声や眼差しのうちに、できるようになった自分への「自信」や、役に立つ自分の「有用感」を育てていきました。また、まだ自分にはできない難しい仕事がこなせ、大きな力を出せる年長者や大人にあこがれを持ち、「早くあんなふうになりたい」「早く大人になりたい」と願ったのです。

私は、ここにこそ、「子どもが大人になる」ということの本来の形、もしくは「仕組み」があるように思います。子どもは、生まれて二〇年たてば自動的に大人になるわけではなく、また、学校に通ってさえいれば大人になれるわけでもありません。

ひるがえって、いまの子どもたちには、「自分が大人に近付いていく」という実感を、具体的につかめるような機会がほとんどないことに気付かされます。現在の子どもの問題や子育ての困難は、現在の社会が「子どもを大人にする仕組み」を失ってしまったことの反映でもあるのではないでしょうか。

なにも「昔に戻れ」というのではありません。ただ、「子どもを大人にする仕組み」がなければ子どもは大人になれないのだとしたら、その「仕組み」を、現在の社会のあり方を踏まえながら、新たにつくり出していかなければならないでしょう。もちろんそれは、学校だけで果たせる課題ではありません。

青少年の声かけあいさつ運動の推進
『大人も子どももすすんであいさつをしよう』

毎月第１日曜日は「家庭の日」
毎月第３日曜日は「青少年を育む日」です。
青少年育成都留市民会議編集委員

広報「つる」広告募集！

あなたのお店の広告を広報つるに載せてみませんか？
広報「つる」は、都留市内の各家庭に配布されています（10,500部発行）ので、多くの方の目に触れます！

問合先：総務課　法制広報担当

広告料金

掲載場所	印刷色	金額 / 枠	備考
裏面	カラー	20,570	２カ月掲載
内面	２色刷り	10,280	２カ月掲載

掲載月は、①1・2月②3・4月③5・6月④7・8月⑤9・10月⑥11・12月の６パターンとなります。
掲載状況は、下記をご参考としてください。
また、詳細につきましては、ぜひお問い合せください。

広　告　掲　載　欄

広　告　掲　載　欄